

安全を守る人たち

—子ども見守り隊—

小東由男

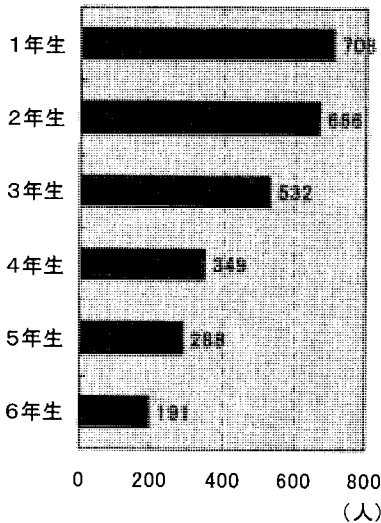
はじめに

4月上旬、黄色い帽子に鮮やかな色の交通安全カバーがついたランドセルを重そうに背負いながら登校する姿が風物詩になっている。それもそのはずで、一年生は入学の初日に、教科書と一緒にこれらの交通安全グッズが支給されているのだ。そして、それ以降の一年間、その使用が求められている。このような品物の支給にはそれなりの理由がある。

下のグラフは、小学校の学年毎の交通事故死亡・重傷者数の推移まとめたものだ。これによると、一番多いのは一年生で、学年が上がると共に事故の件数は減少している。六年生に比べて、一年生の事故件数は約

3・7倍となっている。身に着けてもらい、ドライバーに一年生の存在をアピールするためだ（註1）。

小学生の歩行中の死亡・重傷者数
(2016～2020年警察庁調べ)



児童の心理から事故原因を探る

児童の発達心理学の定説からも、その理由が推測される。一年生は「二つのことに集中すると他のことに気が回らなくなる」「衝動的に行動する」等、幼児期の特徴を依然として持っている。このことが、事故を誘引すると考えられる。

また、物事やそれらの関連性に関する認識力が発達途上であり、事故予知能力は、上学年に比べて低いと考えられる。これらのことから、とりわけ新一年生に対する、分かりやすい実地訓練や幾重にも繰り返される教育が必要とされる。

新潟市中央区の南に位置する山潟地区に在る新潟市立桜が丘小学校の学校行事一覧を調べた。例年、次のような行事が計画されている。

○交通安全に関わる行事

- ・ 4月 春の交通安全運動・街頭指導・一年生下校指導（4日間）
- ・ 5月 春の交通安全教室・一年生交通安全教室
- ・ 6月 子どもの体験型交通安全教室（一年生対象）
- ・ 7月 夏の交通防止運動

- ・ 9月 秋の交通安全運動

地域・行政の協力を得て実施されている。

学校・地域・行政の連携（新潟市）

全国的に子どもの連れ去りや声かけ、車による連れ去り未遂事件などが多発したことを受け、子どもの安全確保のために発足させてきたのが「セイフティ・スタッフ」（2004年～2014年）だ。その後「子ども見守り隊」と名称を改めた。この機会をとらえ、活動中の保険適用を実現したり、他団体との見守り箇所等の情報を交換したりと体制の見直しを実施した。

また、2006年からは「スクールガードリーダー」の名称で、市内8警察署管内に警察官OB1名をそれぞれ配置して、次のような活動を実施している。

- ・ 学校の安全点検指導
- ・ 学校職員、小学校区見守り隊等への巡回指導のポイント指導
- ・ 通学路の点検、巡回
- ・ 小学校区の見守り隊の情報交換会等におけるアドバイス
- ・ 子どもの体験型安全教室（小学一年生対象）の指導

（註2）

子ども見守り隊活動の様子



前出の桜が丘小学校区で17年間に渡り子ども見守り隊のボランティアをしている池田さんと羽田さんに、インタビュウをして活動の様子をうかがった。以下、お話の内容を、重複を省いて箇条書きにまとめた。

・登校時、街角に立ち、交通安全等の見守り活動をする（下校時に実施している人もいる）。

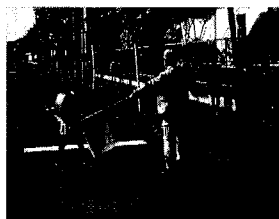
・実施する場所は自分で決めおこなっている。自宅の近くを選んでいる。

・都合が付かず実施しない日もある。

・市から支給された帽子、ジャンパーを着用し、横断旗を持っておこなう。

・新一年生の下校指導の4日間
は、初日に顔合わせをして、
一緒に下校している。

・小針地域で子どもが不審者に
拉致される事件が起きた。見
守り隊員の高齢化、なり手不



足があり、見守り活動の「空白地帯」が増えているのではと危惧している。

事故を防ぐには

交通事故はいくつかの要因が複数関連して発生している。通学途中に事故につながる「危険源」があっても、それらから幾重もの「防護壁」があれば事故へのリスクを減らすことが可能だ（註3）。

例えば道路を歩いているときに、

- ・「見通しの悪い道路を歩く」
- ・「他の児童が先に横断する」
- ・「交差車両が接近する」

・「前の友達に追いつくように急いで飛び出す」
などの要因が重なって発生すると考えられる。これらの「危険源」に対して、次のような「防護壁」は、
どうだろうか。

- 見通しの悪い箇所を通学路としない
 - 高学年児童が正しい横断を実践し示す
 - 内輪・外輪差の理解を促す体験教室で学ぶ
 - 自動車に緊急停止装置装着を義務づける
- また、人と自動車を隔てる措置として

◎歩道橋や地下通路

◎自動車の通行禁止及び時間帯による通過制限

等。現在、様々な「防護壁」の設置が実現している。

人と車とを分離する規制、ゾーン設定の実際



通学路の中で時間帯を決めて、自動車の進入を規制しているのが「スクールゾーン」だ。交通標識に明示されているが、ドライバーにより一層注目してもらうために、看板を一時的に立てている箇所もある。このゾーンの入口にも、子ども見守り隊のメンバーが立っていて、車両が着実に規制を守るか点検している。

また、ガードレールが無い通学路では、路側帯の端が緑色で塗られている。「児童が通る箇所だな」とドライバーに想起させ、徐行を促すものだ。

さらに、児童にとつては緑に塗られたところに沿って整然と歩く目印にも成っている。



おわりに

多くの対策や訓練・教育によって、子どもたちの安全は守られてきている。一層の充実により、事故予防の実を向上させたいものだ。

降雨や積雪の時期にも街角で見守り活動を進めているボランティアの皆さんを拜見するに付け、感謝の思いが湧いてくる。

尚、『にいがたの教育情報』86号の、特集「子どもの安全を守るう」を関連して読みたい。

(註1) 政府公報オンライン「暮らしに役立つ情報」より

<https://gov-online.go.jp/useful/article/201804/1.html>

(註2) 「全市をあげての子どもの安全確保について」新潟市役所「市民生活部市民生活課・教育委員会学校

支援課」資料より

https://www.city.niigata.lg.jp/smp/h/boutan/boutan_index/simiseikatsu.html

(註3) 『子どものための交通安全教育入門』（ナカニシ

ヤ出版・2016年発行）より

(こひがし よしお・所員)